

教養のほそ道

鯨坂 恒夫

教養とは何か、画一的な共通理解が定まらない以上、教養の・ある人・ない人のプロフィールを描くことも安易にはできない。人間の性向をはかる指標には、例えば、リーダーシップのある人・ない人、協調性のある人・ない人など、いろいろあって、いずれにせよ、「ない」方はだめな人と思われがちである。しかし、性向を示す概念にはたいていその反対・裏返しがある。リーダーシップのない人にはフォロワーシップがあればよく、協調性のない人には独創性が先鋭的な可能性もある。

そうすると、教養のない人の裏にあるポジティブな側面は何だろうか。教養とは、思想にせよ歴史にせよ過去のことに対する思慮であるとするれば、過去にとらわれない前進性、といえるかもしれない。あるいは、教養とは、言語を用いることの優秀性であるとするれば、言語に依存しない直観力を持つ人なのかもしれない。

人ではないが、これからの社会に影響を与える人工知能（AI）は、この両方の性質を持っている。機械学習に必要なデータは、過去に属するものには違いないが、思想や歴史を語るものではなく、直近の過去の、人間の洞察を受け付けないほどに膨大で、一見脈絡のないデータであり、めざすのはそこから未来を予測することである。言語については、AIは、それを人間と同じしかたでは、全く理解しない。人間とのダイアログができているように見えたり、自動翻訳や文章の自動作成ができたりするが、これはやはりとてつもなく膨大な文節・文章・文脈のデータ群（コーパス）からの抽出によるものであって、人間がするような、統語的・範列的な構成・形成によってはいない。

情報化が始まって以来、さまざまな作業が自動化されてきたが、どの行動を選択するか、どの程度の量が妥当か、といった判断は人間が行ってきた。AIがもっと広まると、このような判断自体が自動化される。言語的思考による判断ではないので、その判断に至った理由は説明できない。そういう連中とうまくつきあえるのは、ひょっとすると教養のないと思われる人かもしれない。結果がよければそれでよく、経緯や理由を、言葉をつくして、追求することなどしなくてよい、というのもポリシーのひとつではある。

言語が衰退しつつあるのではないかという危惧は、もう少し前からあった。やはり情報化の進展により、電子メールが普及したころ、旧来の手紙に比べて、なぜそのメディアの違いがそのような影響を及ぼすのか、何段階かの間接的関係があるのだろうが、例えば、情緒性がなくなったとはいえる。電子メールの用途がビジネスから始まっているから、というのはひとつの明解な説明であるが、そんなこととは関係なく、手紙の文化はながらえてもよかったのに、急速に衰退していったようにみえる。メディアはメッセージだというマクルーハンの言わんとするところが、ここにも現れたのかとも思える。

そうこうするうちに、電子メールもいまやLINEやSlackなどのインスタントメッセージに押されている。文章表現は短絡化し、時に絵文字やスタンプで記号化し、まるで狼煙のような定型的通信になりはてている。古代・中世・近代と発展してきた言語文化が、現代においてモバイルネットワークを基盤とすることができたがために、原始的な最低限の、あるいは見方によっては最適化された、コミュニケーション手段に収斂していくようである。

言葉を紡ぐことによって、いったい何をしたいのかということ、なんらかの「意味」を表明したいのである。そうではあるが、この意味なるものは意味不明であり曖昧である。他とは違う何かそのことを指したいのだが、その輪郭を確実に描けるとは限らないし、どの程度の正確さをもっているのかも明らかではない。AIはこのような意味での意味は理解しないが、多次元空間に配置されたデータの値を分割して、つまり輪郭を定めて、例えば猫の顔であるとか、需給予測による発注量を提示する。指し示すべきものとそれ以外のものとの線引きを行うことが、AIにとっての意味づけであり、それを言語的にではないが、定量的に決定している。

AIが社会に蔓延していくと、人はそれに同調し依存し、言語や思考を軽視し、人がみな教養のない人になっていくのではないかと思えて、おそろしい。これは情報化やAIだけのせいではない。1979年から始まり、共通一次・センター試験・共通テストと続いてきた大学入試が、その下地を作ったのではないかと思われる。選択肢の中から正解を選ぶという行為は、教養から最も遠いところにある。その行為のためには知識も思考も必要なのだから、教養につながることもあろう、という見解は、たしかに20%ぐらいは当たっている。しかし、残り8割は、個々の問題の本質よりも、むしろいかに選択肢が構成されていて、正解に至る兆候がどこに現れているかを嗅ぎ分ける技を修得するという、教養を積むこととはおよそ異質の姿勢をとっていると思われる。

この共通試験の眼目は公平性にある。出題はたしかに良問であるのかもしれない。しかし、採点の公平性を確保するために選択式にしてしまった。さらに、多くの受験生を均一に処理するために、マークシート方式が採用できたのは、当時最新の、やはり情報技術である。記述式の問題に対する解答を採点する際に発生する恣意性を排除するために、人間から機械へと舵を切った。公平・平等を頂点とする思潮は、戦後日本民主主義の典型であり、情報技術がそれを援護したのである。こうして入試の公平を極限まで精緻にはかったところで、とくに直近さわがれている、主に経済的な不平等・分断が著しいのは、どうしたものなのだろうか。

受験に限らず、近年はさまざまな社会的活動において、規則を求め、規則に従おうとする傾向が強い。なにも法や道徳を破れと言っているのではない。あまりに微細に規則を求めすぎるのではないか、すべて規則に従って行動するのなら、それは機械にできることであって、人間の存在理由を否定しているのではないか、ということである。人間が判断する以上、専横の可能性はたしかにある。しかし、それをゼロにすることは、人間が機械になることに等しい。

それでいいじゃないか、という人が、もしいたとすれば、それこそが「教養のない人」である。しかも、それは、しょうがない人だなあ、と放置しておくわけにはいかない。そういう人たちが徒党を組んでマジョリティを形成したりすると、人類は減じる。現代、ここ数年以降の現在は、とくに人間と機械のせめぎ合いが、過去の歴史になかったほど緊迫している。そうとは気づかぬ人も多だろうが、そうなのである。そのせめぎあいで、人間が機械に下らないために、教養があってほしい。

教養ということについては、歴史・思想・文化・芸術の素養のほか、無用の（役に立つことを前提としない）知識と思考、シティズンシップ、多視点・領域横断であること、などなど、いろんな属性が語られるが、ここに、人間とあろうものが機械のようにならないために、という説明を加えたい。「教養の森」センターの英語表記である Center for Human Enrichment はこれに通ずるが、人間のカウンターパートとして機械をとくに意識したところが最新式である。

機械が人間と最も違うのは、ケミカルな身体性を持たないことである。AIのようなソフトな機械だとフィジカルな身体性もない。人間が理解する意味に機械が到達できないのは、最終的にはこれが原因に違いない。機械は視覚と聴覚の認識・解析と合成はできるが、例えば音声を発する時の喉や口唇の感じなどはわからな

いし、風にせよ日の光にせよ肌で感じるということもできない。単語の意味は、物理的事象を示すものはもちろん、抽象概念を表す単語も含め、身体性を求めるはずである。構文（統語）は形式的に見えるが、「意味の構文化」という見方があるように、混沌とした意味の泥沼のごく一部を体系化したにすぎないので、やはり機械には捉えきれない。範列（語句の組合せ）に至っては、まさに意味の妙味であって、人間のする構成的手法と、機械のするコーパスの検索・フィルタリングは別次元である。

範列の破綻（カテゴリー錯誤、構文的には正しい）を示す例に、“Colorless green ideas sleep furiously”（色のない緑のアイデアが癡猛に眠る）というのがある。生成文法の体系で計算機科学でも有名な言語学者・チョムスキーが提示した。作文の採点をするAIは、期待どおりに低い点数をつけるだろう。しかし、人間には、なんらかの比喩、あるいは詩的情景が見えるかもしれない。シュルレアリスムのな何かかもしれない、「解剖台の上のミシンと蝙蝠傘の偶然の出会いのように美しい」（ロートレアモン）とどう違うのか、違わないのか、考えることもできる。岩にしみ入る蟬の聲も、「論理国語」としてはコード逸脱であろうが、しみ入ることに対する身体的感覚が、山寺という場面設定とあいまって、セミの鳴き音も滲み入っていいことにしてしまう。

◆8

機械になりたいと切に望む人はそんなにいないと思うが、うっかりすると機械になってしまうからしっかり教養を蓄えないと、と意識する人も同じぐらいそんなにいないのではないか。教養は、ひよっとすると、かつて隆盛を誇っていたものがいまや廃れ、復権を待ち望んでいる、という事情ではないのかもしれない。ローマに通ずる太い道など一度も通ったことはなく、いつも細道を、しかし枯れることなく、流れていくものなのかもしれない。